

神聖なる師に魅了される瞬間

60年間近く敬虔で信心深い帰依者であった、タミルナードゥ州出身のラニ スップラマニラム女史（訳注：2012年12月1日逝去）が、バガヴァン ババ様のもとを訪れたのは、早くも1950年のことでした。現在85歳で（2008年4月時点）、バガヴァンは親しみを込めて彼女のことを「ラニ マー」と呼ばれていました。彼女の人生は、往年のきらめく体験の宝石箱でした。真摯な霊性求道者である彼女は、現在、プッタパルティに在住し、深い信念、洞察力、そして信仰心を持つ熱心な帰依者たちのために、彼女を高めた数々の思い出を分かち合ってください。これは彼女の素晴らしい回想録の第8部です。第1部～第7部を読まれる方は、下記をクリックして下さい。

[「ゴッドマザーに捧げる頌歌」](#)

[第1部](#) [第2部](#) [第3部](#) [第4部](#) [第5部](#) [第6部](#) [第7部](#)

ラニ マー女史へのインタビューより

第8部

1950年代の荘厳なるダシャラー祭

1950年代と60年代のダシャラー祭では、かなり異なっていました。私たちは当時、パタマンディラム（旧マンディール）に滞在していました。これは（マンディールが）プラシャーンティ ニラヤムに移転する以前の事です。祝賀祭は、現在私たちが目にしているようなものではありませんでした。スワミが（お祭りの）行列に加わっておられました。スワミは4人の男性に担がれた輿で運ばれていました。当然ながら、スワミは私たちよりも高い場所におられました。私たち帰依者は後ろに下がって、スワミに向かってバジャンを歌っていました。



きちんと舗装された道路もなく、行列は非常に夜遅く始まりました。私たちは石につまずいたり、棘を踏んだりしましたが、そういったことすべてに気を取られることはありませんでした。私たちはただスワミを見ていました。そのことが私たちに大変多くの喜びをもたらしました。各自、帰依者にはスワミが異なって見えていたのです。何人かの人たちにはスワミが母なる神として、そして他の人たちには、彼らのイシュタデーヴァター（個人が信じている神）として見えていました。各自がスワミのことを、自分が好んだ観方で見えていました。それはとても個人的なことだったのです。

当時、スワミの衣服は豪華でした。今日、人々にはそれは信じがたいかもしれません。スワミの衣服はブロケード（金らん豪華な錦織）で、ザリ（装飾用枠の模様）で装飾されていました。帰依者がそのように（スワミに豪華な衣服を身につけて頂くことを）望んだからです。ダシャラー祭の期間中、スワミは聖なる母の化身であられるのです。それ故に、スワミはオークル色（黄土色、オレンジ系色）を見につけることができませんでした。帰依者はスワミを素晴らしい衣服で着飾り、スワミもそのことを許可されていました。



ザリの一例（参考映像：<http://www.shutterstock.com/s/%22decorative+borders%22/search.html>）

このようにして、行列はプッタパーティ中を歩いていました。しかし当時のプッタパーティはとても小さな場所で、1本か2本の道路しかありませんでした。土地全体が森のようで、家々も道路もなく、人口も約300人ほどでした。

行列は夜中の12時か1時に終了していましたが、私たちを疲れさせるものは何もありませんでした。それ（ダシャラー祭の行列）は、私たちが強く願ったことでした。いいですか。私たちはほとんど眠ることもなく、当時は適当なお店もありませんでしたので、ほんのわずかなものしか食べませんでした。とても質の悪い米、平豆や、他には長い時間の調理が必要なものを売っている店が1軒だけありました。

それで私たちは食用油と他の食物を（自宅からプッタパーティまで）持参し、2つのトラックは荷物でいっぱいになっていました。またお料理も調理のための槓があるかどうか次第でしたので、早く調理することはできませんでした。台所はありませんでしたので、野外で調理していました。これが1950年代当時の様子でした。

歓喜のジューラ ダルシャン

その後、ジューラ ダルシャン（スワミがブランコにお乗りになるダルシャン）がプラシャーンティ ニラヤムで取り入れられました。ダシャラー祭の最終日、ヴィジャヤ ダシャミーの日、スワミはいくつもの花輪で装飾された美しいジューラ（ブランコ）にお座りになっていました。

スワミもまた、とても豪華に着飾っておられました。帰依者は歌を歌い、ジューラを優しく押しました。これはヴィジャヤ ダシャミーの日の夜に行われました。これはジューラ プログラムと呼ばれ、夕食後のみ、午後 8 時 30 分に始まりました。



その頃は、皆が形式張らずにブランコの周りにただ座っていました。当時は規則も何もありませんでした。早く行きますと場所が確保できます。その後、物事が徐々に変わっていきました。スワミの御降誕の日に、私たちは皆スワミのもとに行き、花輪を捧げてナマスカーラム（平伏）しました。すべての人が中に入らせて頂き、どんな人にもスワミは機会を与えられました。スワミは椅子に腰かけておられました。母なるイーシュワランマ様がスワミに聖油を塗られていました。

スワミの御降誕の日には、彼女（イーシュワランマ様）が聖油を塗られた後に、一列に並んでスワミのもとに行つて花輪を捧げました。今日では、もちろん多くのことが変更され、お祝いも完全に変わりました。私たちは日に 2 度、毎日パーダナマスカール（スワミの蓮華の御足に平伏し触れ、礼拝する）を行っていました。ほんのわずかだけ、身体的に触れることが可能でした。今日、このようなことは人間的レベルでは不可能です。

願望の成就

現在は娘が所持している小さな黄色のポーチの出来事について、皆さんと分かち合いたいと思います。

初期の頃、1950 年代から 1960 年代の頃、ニューデリーの帰依者たちはとても幸運でした。時折、ダシャラー祭やスワミの御降誕際のようなお祭りの際は、プッタパルティに行くことができない帰依者のために、行事の参加していた者がプラサーダムを持ち帰

っていました。

しかしながら、私はさほど幸運ではありませんでした。当時はインドールに住んでいて、そこには帰依者は誰もいなかったからです。一方、私の 2 人の姉妹はニューデリーに住んでいました。私はよく彼女たちのプッタパルティへの旅に合流して一緒に行っていましたが、時折行けないこともありました。私はプラサーダムを頂く好機を逃したことについて、自己憐憫に浸り、悲しんでいました。

ある日の午後、私たちと同居しているコックがドアのベルを鳴らしました。私は彼のためにドアを開けに（玄関に）行きました。そしてドアの前の床の上に小さな黄色のポーチを見つけました。それは布のポーチでした。私はそのポーチがコックのものだと勘違いして、彼のものではないかと尋ねました。「いいえ、アンマー」と、彼は言いました。好奇心から、私はそのポーチを開いてみることにしました。



びっくりしたことに、そのポーチの中はヴィブーティとクムクムの小袋でいっぱいでした。スワミが遍在であることを私は真に悟りました。わかりますか！ プラサーダムを受け取る好機がないことを私が嘆き悲しんでいたのも、バガヴァンが私の家の玄関先まで届けてくださったのです！ これはバガヴァンのクリパー（慈愛）です。この貴重なポーチは私の娘に譲りました。

あなたは家長かもしれませんが、あなたが真に神を愛し、神のためだけに生きていることを自分自身が知っているのであれば、神は聞いておられます。

神はすべての祈りを聞いておられる

スワミはすべてをご存知です。私たちはサドゥース（苦行者）ではなく、単にサドゥーージャナス、無害な人々にすぎません。私たちは祈りますが、ただそれだけです。瞑想や苦行を課したわけではありません。しかし、スワミからのお呼び出しがあり、最初にプッタパルティを訪れた際に、スワミは私たちを変革なさいました！

どのようにしてでしょうか？ 両親が子供たちのために祈るとき、スワミはお聞きになるとスワミはおっしゃいます。（両親は）自分の子供が善い地位に就き、多くのお給料を稼げるようにと祈り、スワミはお聞きになっていますが、その祈りはスワミを喜ばせ

る祈りではありません。しかしながら、自分の子供たちが全身全霊で神を愛し、神に奉仕することを私たちが祈ると、スワミは大変喜ばれることでしょう。スワミはこのような祈りを叶えられます。私の母もそのように祈っていたと思います。なぜなら、今私たち姉妹はスワミと共にいるからです！ スワミはかつて、私たちの母がとても信心深い女性だったとお話してくださいました。彼女は若くして亡くなりました。

しかし、母の願いは、娘たちが神にしっかりとしがみついていることでした。スワミはかつておっしゃいました。

「母の祈りが、あなた方3人姉妹をここに導いたのです」

どのようにしてスワミは私の母について知られたのでしょうか？ スワミは私の母に一度も会われたことがないのです！ この考えは、スワミが本当に私たちの心からの誠実な祈りを聞いておられるという信念を強固なものにしました。ここで加えてお話ししたいのは、私の祖母も大変神に対して信心深かったことです。そして祖母も同じように祈っていたことでしょう。

神の任務を授かる

仕事の都合で、私の夫はボーパールに移転しました。ご存知かもしれませんが、ボーパールはインドのマディヤ プラデーシュ州の首都です。そこは、私が初めてプッタパルティを訪れた頃に住んでいた場所です。ボーパールから（プッタパルティ）を訪問した際の出来事が思い出されます。ある日の夕刻、プッタパルティでスワミは上階に来るように私を呼ばれ、お尋ねになりました。

「あなたは今、マディヤ プラデーシュ州に住んでいますね？」

私は言いました。

「はい、スワミ。私はボーパールから参りました」

私たちは頻繁に住まいを移転していましたので、スワミはよくどこから来たのか、お尋ねになりました。そしてスワミはおっしゃいました。

「ボーパールには、サティヤ サイ サミティ（センター）がありません。そこであなたがサティヤ サイ サミティ（センター）を始めなさい」

そしてスワミはプラサーダムとしてリングを私にくださいました。

私はサミティ（センター）を開始する方法は知りませんでしたが、できないと申し上げることもできませんでした。私はとても不安になりました。私はスワミに何も話していませんでしたが、内心とても不安でした。私は祈りました。

「スワミ、そこで私が知っている人は誰もいません。どのように人々と連絡をとればよいのでしょうか？ どのようにスタートすればよいのでしょうか？ 私は何も経験がありません」その後、私はボーパールに戻りました。

スワミがその仕事のために私を選ばれたのなら、何らかの形で私にスタートさせてくださるだろうと考えていました。スワミは常にそこにいてくださいました！ 私は様々な友人を通して、いくつかのグループにシュリ サティヤ サイ ババについて知っているか問い合わせ始めました。あるご婦人が、工場労働者のグループを知っていて、そこには接客係、事務員、日雇い労働者などが含まれており、毎週木曜日にサイ バジャン会が開催されていると教えてくださいました。

私はその小麦工場に行きました。その場所は非常に広く、どの扉をノックすればよいかわかりませんでした。労働者のためのたくさんのアパートがありました。私は祈りました。

「スワミ、どうか正しい扉に私を導いてください」

私は2階（英国やインドでは1階）に行き、ある扉をノックしました。ひとりの紳士が扉を開けてくれました。私はその紳士にサイの帰依者を知っているかどうか尋ねました。

彼自身がサイの帰依者だと言い、私を部屋の中に招いてくれました。彼のアパートの部屋にはスワミのお写真がありました。その紳士は言いました。

「私たちはあなたのために何ができますか？ なぜ私たちのところに来られたのですか？」

私は彼にプッタパルティからのご命令について話し、彼に助けてくれるように頼みました。彼は言いました。

「わかりました。マー（お母さん）、どのような助けが必要ですか？」

私は定例バジャン会や、子供たちやご婦人方のためにスワミの御言葉を広めるための授業（教室）が開催でき、またバジャンを教えることのできる部屋がないか、彼に尋ねました。彼は言いました。

「はい、問題ありませんよ。あなたに提供できる祈りのホールがあります」
授業を始めなければなりませんだったので、私は彼と一緒に手伝ってくれるようお願いしました。

「問題ありません」と、彼は再度言いました。

「私はあなたのお手伝いをします」

娘は当時私と一緒に暮らしていました。ですから娘にも手伝うように頼みました。私は婦人部を組織し、バルヴィカスの授業を実施しました。しかしながら、私はバル ヴィカスのコースのカリキュラム（教育課程）を知らなかったもので、独自のカリキュラムを創りました。

一度、共通の友人を通じて婦人クラブの秘書に連絡をとり、クラブを訪問して、スワミについてご婦人の方々にお話ししたいと伝えました。そのために秘書の許可をとり、その秘書と共通の友人ともうひとりの私の友人と私は、そのクラブに行きました。私が

そこで見たのは部屋でビリヤードをしている女性たちでした。他の部屋ではカードをして遊び、他の部屋ではその他のゲームに興じていました。クラブのメンバーは事前に私の訪問と目的が伝えられていることを教えてくれましたが、多くの人は興味を持っていませんでした。3、4人ほどのご婦人が座っているだけでした。そのことで私が悩むことはありませんでした。私は灯をともしましたが、スワミのお写真を掲示しませんでした。その代わりに、テーブルの上に私が持参したサルヴァ ダルマのシンボルマークを置きました。

ご婦人方は懐疑的でした。彼女たちは、私が彼女たちをサイの帰依者に改宗させるためにそこに行ったと思っていたのです。私はスワミがすべての宗教のもの（神）であり、私には彼女たちを改宗させる意図はまったくないことを伝えました。すると彼女たちはリラックスしたようでした。そして私はトゥラスィーダース（ラーマーヤナの語り手であり、著名な詩人）のバジャンを歌い始めました。私は目を閉じて、そのようなバジャンを2、3曲歌いました。目を開くと、驚いたことに20人から25人ほどのご婦人方でその場所はいっぱいになっていました！彼女たちは是非参加したいと言ってくれました！

その後、私は広大なバーラト重電機（インドの国営総合電機機器製造会社）のキャンパスを訪れました。そこは実際小さな行政区でした。私は会長に面会し、私の目的とシュリ サティヤ サイ セヴァ サミティ（センター）について説明しました。十分に説明した後、彼は喜んでホールを提供してくださいました。私はそこにサルヴァ ダルマのシンボルマークを設置しました。BHEL（バーラト重電機）ホールでは、製粉工場で活動に加わってくださった多くの友人たちが、なぜスワミのお写真を設置しないのかと尋ねました。



サルヴァダルマ

そうする（スワミのお写真を置く）ことで、会合に興味を持っている人々が遠のくかもしれないからと、私は告げました。加えて、そうする（スワミのお写真を置く）ことが目的ではないからです。スワミは私が正しいことを行ったとおっしゃいました。スワミご自身が、60歳の御降誕際のご講話の中でこれについてはっきりと述べておられます。「あなたが何かを始める際に、私の写真を持って行ってはなりません。それはオーガニゼーションの方針に反することです。私は単にこのサティヤ サイ ルーパ（姿）だけに留まりません。私は普遍です。ですから私のシンボル（サルヴァ ダルマ）のみを設置しなさい」

多くの困難を乗り越える

私は4か所の工場から、約8人から10人の労働者を含む会員による委員会を組織しました。その委員会は、決してシュリ サティヤ サイ サミティ（センター）として承認されることはありませんでした。プッタパルティを訪問する予定のひとりの紳士がいました。そこで、私はスワミに私の手紙を届けてくれるように渡し、彼に言いました。

「最前列に座り、スワミに手渡して、『これはラニ マーからの手紙です』と言ってください」

この委員会をスワミが祝福してくださるよう、スワミにお願いして欲しかったのです。

スワミはその手紙をお受け取りになりました。その手紙にはそれほど多くのことは書かれていませんでした。その手紙には委員会が形成されたこと、委員会の会長、書記や他のメンバーの名前が記されていました。しかし、私の名前はそのリストには記載しませんでした。スワミはその手紙をご覧になると、差し戻しておっしゃいました。

「私はこの委員会の承認にサインすることを拒否します。それ（手紙）を持って帰りなさい。ラニ マーにこれは正しい委員会ではない、と伝えなさい。これでは機能できません。それ（手紙）を彼女に戻しなさい。祝福はありません」

その人は戻って来ると、バガヴァンが何をおっしゃったかを私に話してくれました。「スワミは、『それ（委員会）はすべて不適切で、正式な委員会ではありません』と、おっしゃいました。変更しなければなりません」と彼は言いました。私は座り、祈りました。スワミに、私は誰も著名人を知りません、と申し上げました。

友人を通じて、私は州知事であるレディ夫人に会いました。友人がこの尊敬されているご婦人とのアポイント（約束）をとりつけてくれました。最初に、レディ夫人は私に訪問の理由を尋ねました。私は夫人に、ポーパールでシュリ サティヤ サイ サミティ（センター）を始めたいことを話しました。彼女は素っ気なく言いました。

「私はサティヤ サイと関わりを持つことをお断りします。私はサティヤ サイのことを信じていません。私から何らかの援助を期待しないでください」

私はショックを受けました！ 彼女はとても不愛想だったのです。私は数秒間、目を閉じてどうすればよいかを祈りました。

内なる声は私に、諦めてはいけないと言いました。

「求めなければなりません。諦めてはなりません！」

夫人は素っ気なく私に帰るように言いましたが、私は帰りませんでした。なぜ夫人が信じていけないのか理由を尋ねると、彼女はこのように話しました。



「私は2度、プッタパーティに行きました。サティヤ サイ ババに会うためにマドゥライから私の友人も連れて行きました。その友人はマドゥライ工場のトップ経営者で大変お金持ちです。私は友人と彼の家族に同行してババのアシュラムに行きました。友人には18歳ぐらいの重病の息子がいました。医者は望みを捨て、息子はそう長くは生きられないと告げました。それで私は友人にサイ ババについて話しました。友人は私に、一緒に同行してスワミに祝福を頂いて、息子を治してもらえるよう頼んでもらえないかと私に頼みました。プッタパーティでその工場のオーナー（所有者）はババからインタビューを授かりました。彼はババに息子を治すことができるかどうか尋ねました。サイ ババは、その少年は大丈夫です、とおっしゃいましたが、その少年は亡くなりました。なぜスワミは嘘を言ったのですか？ スワミが神でありえますか？ 私を納得させてくれるのなら、あなたのお手伝いをしましょう」

私はその理由を彼女に説得しようと努めました。

「いいですか、レディー夫人、私たちには主原因はわからないのです。何よりも先ず、霊性が理解されなければなりません。そのことは『バガヴァッド ギター』にも記述されています。それは英知です。私たちの霊的人生（生活）が英知です。人はやみくもに宗教に固執することはできません。あなたは失望し、動転し、不幸になるでしょう」

「私にとって、全ジャガット（世界）が非真実（偽り）です」ーババ



もうひとつの出来事が思い出されます。この点をはっきりとさせるために、簡潔にお話ししましょう。ひとりのご婦人と彼女の娘がプッタパーティを訪れました。娘は結婚をしてまだ2、3年ほどでしたが、医者は娘を癌と診断しました。お母さんは取り乱しました。スワミはそこで奉仕をしている私の妹をお呼びになり、2人の母娘の面倒をみるようにおっしゃいました。スワミはお母さんには、すべては大丈夫です、とおっしゃいました。しかしながら、数日後にその娘は亡くなりました。

私の妹はスワミに駆け寄り、スワミがなされた約束について尋ねました。スワミはお応えになりました。

「私はマンガラ スワルーパ（吉兆の化身）です。どうして私がマンガラ（吉兆）ではないことを話すことができますか？ 私は真実を語るだけです。嘘が真実に相対するものとして存在していないように、嘘と真実の間には何の相違もありません。あなた方、人々が体験していることは妄想なのです」

スワミは私の妹におっしゃいました。

「仮にあの女性に『あなたの娘が 5 日、あるいは 5 か月で死ぬだろう』と伝えれば、彼女はそれ（亡くなる）までの間、昼夜苦しむことになるでしょう。彼女の娘も絶えず苦しむことになります。彼女たちは眠れなくなるでしょう。とても不幸になるでしょう。既に彼女たちは嘆き苦しんでいます。不安にさせ、悲しみを創造するために私は来たのでしょうか？あるいは平安を与えるために来たのでしょうか？私はあなた方人々と、真実の神のレベルで話し合うことはできません。あなた方には理解できないからです。それは非真実（偽り）ではありません。私にとっては、全ジャガット（世界）が非真実（偽り）です。それがあなたの問題であっても他人の問題であっても、それらは非真実（偽り）なのです」

スワミは単なる盲目的な信仰はまったく役に立たないことをおっしゃっているのです。バクティ（信愛、帰依心）がなければなりません。

私が彼女（レディー夫人）にこのことをすべてお話しすると、レディー夫人に完全な変容が起きました。彼女はラジ バヴァン（州知事のお屋敷）の全従業員が授業に参加することを許可してくださいました。私はまた彼女に、委員会の会長に就任して頂くようお願いしました。加えて、私はどのような地位も望んでいないことを申し上げました。私の目的は、ただスワミに従うことだけでした。

しかしながら、多くの議論の後、私は共同の書記になることに応じました。次に、私は副会長を必要としていました。私はダタール シング卿を知っていました。彼は大変著名な方で、英国のナイト爵を授けられていました。私がシング卿のことを知っていたのは、彼の娘さんたちがアーナンダモーイー マーの帰依者で、私が彼女と非常に親密な関係だったからです。私はダタール シング卿に電話をしました。彼はシーク教徒であり、このオーガニゼーションはヒンズー教の団体なので、そのポストを引き受けることを辞退したいと言いました。

「あなたがシーク教徒であるのでしたら、なお更、（サイ オーガニゼーションの）副会長に就任する理由があります」と、私は言いました。

彼は理解を示してくれませんでした。私は彼にコンセプト（基本理念）について説明しました。

「私たちの間には何の違もなく、カルト儀式や教派もなく、特定の宗教もありませんが、唯一の愛の宗教があります。理念とは世界をひとつにすることです」

私は彼に言いました。

「小父様、あなたはグル ナーナクに祈ります。私たちはあなたにババに祈るように言っているではありません。しかし、あなたのお名前を与えて頂き、スワミのご使命を受け入れてください。あなたはただスワミのご使命を受け入れなければならないだけです。スワミご自身を受け入れる必要はないのです！」

彼は賛同してくれました。

その委員会は、会長に州知事の妻であるレディ夫人、副会長にダタール シング卿、そして他の委員メンバーが就任して結成されました。役員のメンバーは全員年長者で、社会において権威のある地位に就いている方々でした。

その後、しばらくして他のもうひとつのグループがプッタパーティに行き、スワミに新しく書き直した委員のメンバーリストをお見せしました。スワミはおっしゃいました。

「大変善い委員会です。ラニ マーに、私はとてもハッピーですと伝えなさい。この委員は適任です」

後にスワミは私におっしゃいました。

「わかりますか、これらの普通の人々が他人のために何ができるでしょう？ 彼ら自身がさほど裕福ではありません。尊敬される人々は公共施設を開設することができます。彼らは大学などを開設できます」

スワミがなさることはすべて理由があるのです。スワミは正しい適任の人々が、適切なときに、適切な場所で、適確なことを行うのを願っておられます。貧しい人々が病院や大学を開設できるのでしょうか？

スワミがボーパールのシュリ サティヤ サイ セヴァ サミティ（センター）を開設された方法はまさに奇跡でした。会員になる可能性のある人たちは、最初は現れませんでした。スワミは他の人に話して納得させるために、スワミの要望を満たすためのブディ（考え、英知）を私に与えてくださいました。ここで中核になる理念とは、神の仕事において人はエゴをいっさい持つてはいけないということです。あなたがババに従いたいのなら、エゴの余地はまったくありません。あなた自身を神に委ねなさい。トワメーヴァ サルヴァム。そうすればスワミはあなたの人生に介入されます。

神による神聖な手術の助手

私はまたとない（唯一の）出来事を分かち合いたいと思います。それは私の娘、シーラに関することです。彼女は当時 9 歳ぐらいでした。その頃、バジャンの時間帯は完全にスワミの決定次第でした。ある日、私がバジャン ホールにいる間、カストゥーリ氏が入って来られ、スワミが私の娘に上階に来るようにおっしゃっていると言いました。それはスワミのお望みでしたので、私はシーラにカストゥーリ氏と一緒に上階に行くように言いました。シーラは他の子供とスワミと一緒にいる部屋の中に通されました。その子供は幼い少女で、深刻な咽頭の難病に苦しんでいました。

スワミは手術をなさるおつもりで、そのお手伝いができるかどうかシーラにお尋ねになりました。

「私がハサミ、コットンや他のもの等を要求した際には、私に渡しなさい。わかりましたか？」

娘はスワミが要求なさっていることを十分に理解していたわけではありませんが、それでも（スワミの手術を手伝うことに）同意しました。スワミは手術に必須の道具や薬品を物質化され、苦しんでいる少女の喉の手術を実施なさいました。

手術後、シーラは階下のバジャンホールに降りて来ました。

「なぜスワミはあなたをお呼びになったの？」と、私は彼女に尋ねました。

「アンマー（お母さん）、わかりません。スワミは幼い少女の手術をなさいました。私はスワミに、ハサミ、コットン等、スワミがおっしゃったものは何でも手渡しました」信じられますか？ 私は茫然としました。申すまでもなく、その幼い少女は完治しました！

神のみが唯一正しい処方箋をご存知である

もうひとつの出来事を分かち合わせてください。私たちがナーグプルに暮らしていたころ、シーラは10歳ぐらいでした。突然、何の前触れもなく、シーラは華氏100度（摂氏37.8度）の高熱に見舞われました。地域の何人かの名医に診て頂きましたが、どの医者も原因を特定することはできませんでした。医者たちは結核症が原因なのではないかと考えていました。検査が行われましたが、どの検査結果も完全な健康状態を示しました。一体どこに問題があるのでしょうか？

当時、私の夫の友人がデリーから帰省していました。彼は医者で、シーラを検査することに同意してくださいました。彼は、娘はそれほど深刻な病ではなく、子供によっては新陳代謝率が遅いので、そのことが原因でこのような症状になったのではないかと言いました。しかしながら高熱が下がる様子はまったくありませんでした。このような症状が2、3か月続きました。私は医者への信頼を失いました。私は夫にプッタパルティに行く許しを願いました。

「そこ（プッタパルティ）には医者はいないではないか」と夫は言いました。しかし、私は断固として娘と一緒に連れて行き、スワミに会いたいと言いました。



私はバガヴァンにお会いしました。そのとき宿泊施設は満室でしたので、スワミはガレージの一部に滞在するようにおっしゃいました。それで、私の娘、（一緒にそこにいた）、妹と私はガレージに宿泊しました。スワミは私におっしゃいました。

「私はなぜあなたがシーラを連れて来たかわかっています。彼女は熱が出ています。そうですね？ 心配してはなりません。彼女は大丈夫です。しかしあなた方は1か月ここ

に滞在しなければなりません」

スワミはシーラに午前 9 時以降の外出を禁じられました。

「彼女を太陽にさらしてはなりません」スワミはおっしゃいました。

「あなたはとても気を配らなければなりません。あなたが洗濯のため外出する際は、彼女が部屋の中にいるように鍵をかけなさい。私も彼女の面倒をみます」

1 か月後、スワミは私たちに外出を許可してくださいました。1 か月間、スワミはシーラの熱を測ることもなく、何も治療はなさいませんでしたし、私も何もしませんでした。私たちがナーグプルに到着後、夫が娘の熱を測ってみると平熱でした。私は人々に、スワミの行為の理由を説明することができません。

第 9 部（最終回）へ続く・・・

出典：http://media.radiosai.org/journals/Vol_06/01NOV08/14-h2h_special.htm